

インドで考えたカースト、階級、ジェンダー、つながり インド・スタディーツアー参加者の報告から

2007年3月、インド・チェンナイで開かれたIMADR第7回総会⁽¹⁾の後に、IMADRはスタディーツアーを実施しました。IMADRのパートナー団体である農村教育開発協会（SRED）の活動家とともに、2004年末に起きたインド洋大津波の被災地やその他の活動実施地域を訪れました。日本からは、IMADR-JC賛助会員を中心に19人が参加し、ダリットや先住民族の組織化を担う活動家たちと出会い、意見を交わす機会となりました。ここでは、参加者から寄せられた感想の1部を紹介します⁽²⁾（編集部）。

農村教育開発協会（SRED）は1984年から拠点を構えて活動を展開してきた。実際には運動は1979年から始まっており、すでに30年近く経つ。「カースト制度自体を取り払うことはできないが、30年の成果でダリットの解放は進んだ。運動を継続させるためにさまざまな活動を行ってきた」と代表のファティマさんは語る。

SREDが支えるタミルナドゥ女性フォーラム（TNWF）⁽³⁾はタミルナドゥ州内に400人近い女性のコミュニティ・リーダーを抱えている。毎年これらの女性たちが集う大会が開かれ、どこかで問題が起きればすべての運動体が結集する仕組みができています。エンパワメントの結果、女性たちの政治参加が進んだ。現在タミルナドゥ州でTNWFが送り出している女性の地方議員は285人。「公正、平等な社会」をめざして力を入れてきた教育啓発活動が静かにゆっくり花を咲かせている。未組織の女性たちが覚醒され立ち上がる。その代表的な活動の1つがマタマ解放運動である。主に南インドのダリットの村々に残る習慣で、病気治療を理由に貧しいダリットの女児が地元のヒンドゥー寺院のマタマ（女神）に捧げられる。その子はマタマと契りを交わしたとして、生涯結婚を許されない⁽⁴⁾。困難

な境遇におかれた女性たちが、神の定めとして受け入れてきたマタマという立場から、今、決別を始めている。「マタマがつけなくてはいけない首飾りはずしたことで世界が一変した」、そう語る女性の言葉に人間の尊厳をあらためて感じた。もう1度訪ねてみたい、そんな余韻を残したSRED訪問であり、インド・スタディーツアーだった。

小森 恵（部落解放・人権研究所）

インド洋津波被災地・カナル村を訪問。どこの村へ行っても、伝統的な迎え方があり、照れ臭さもあるが、歓迎されていることが伝わってくる。太い木の幹に、ここまで水が来たという印が付けられてあり、その高さ、そして家の形を見るだけで、家全体の冠水という見当がつく。しかし、国からの支援はこの村には届かないという現実。村人からは、舟や網を欲しいとの希望が出されたが、額きつつ心の中で「ごめんなさい」と言うしかなく、これまた辛いことであった。

そのような中、SREDの具体的支援には、頭が下がった。なかでも、牛や山羊の支援には、生活の違いを改めて知らされたが、実際の的確な支援が行なわれているように感じた。しかし津波被災以前までの回復には、まだ相当時間を要すると思う。

総じて、予想を遙かに超える実際の、差別どころではない差別が厳然とあることに驚きを禁じ得なかったが、これがインドにおける実態であるとしが言いようがない。とりわけ、「津波被災による遺体処理は、ダリットの仕事」という説明には、かつての日本が、被差別部落の方々に同じことを押しつけたことを連想せざるを得なかった。

人間は、自分が少しでも価値があると感じたいために、自分よりも価値の低い存在を作りたがる。この行為は、形こそ違え、どの時代、どの民族にも歴然とあること、いやそれどころか、自分の内にあることを改めて示さ

SREDの事務所にて



れた1週間であった。

小林 眞 (日本キリスト教団牧師)

インドではダリットでないということは必ずしも裕福の証となるものではない。みな貧しくたがいを差別することで秩序だっている。そうであれば、1つの現実も語る人によってさまざまな姿をみせることになる。津波で被害を受けた漁民には緊急援助として政府から約3000ルピーほどが支給されたはずだが、「来ていない」という人もいた。通訳のSREDメンバーは、「そんなことはない」と否定した。被害を強調し支援をほしがるのは、やはり貧しさが言わせる言葉だろう。浜には色とりどりの漁船が並んでいるが、漁民すべてがエンジン付きの漁船をもっている訳ではない。話をした漁民は、朝6時から11時半までの労働で1日60ルピーの稼ぎだという(私たちは、彼らの5日分の給料を1人の昼食代としてペロリと食べてしまった)。

その漁民地域のはずれがダリットの居住地域。ここでは、直接の漁業被害がないことで補償の対象とならなかったというが、土地は冠水し粗末な家は土台ごと倒れ家財は破損した。それでも津波被害はないということにされた。

インド政府は海外からの援助をことわり自力での援助をアピールした。しかしその後の、津波被害を漁業被害のみにすり替えた緊急援助は、漁業権のないダリットが入り江や内海で細々で行なう小魚とりには適用されなかった。インドはNGO大国だが、ダリットなどのマイノリティの声を反映させるために、NGO相互のネットワークの必要性を痛感した。 安田 耕一(解放新聞社)

大阪同企連が昨年寄付して建設が進められた、ムトゥール村のダリット子どもデイケアセンターを訪問する機会に恵まれた。そしてあることか、訪問当日が開所式に当たっていた。車が現地に着くや、盛大な歓迎の太鼓と踊りが始まった。建物前の広場は開所を喜ぶ人であふれている。こちらも嬉しくなって一緒に踊っていた。男性も女性も大人も子どもも長老もともに祝った。子どもの勉強やデイケアだけでなく、結婚式や村のイベントなども含めて村の中心的な場所になることをとても喜んでいただいた。

IMADR 総会も含めて現地5日間と短いあ



上) マタマ解放運動の女性たちに出会う

下) 津波被災地を訪ねる

いだではあったが、さまざまなダリットの村、津波で大きな被害を受けた漁民の村を訪問し、カースト差別のさまざまな形態を学び、当事者と交流・意見交換をさせていただいた。カースト制度のもとでいかに理不尽な暴力が振るわれているか、そして裁判制度——社会的正義を実現すべき司法制度——の中でも人権侵害が行なわれていることなどを、当事者から直接につぶさに聞くことができ、とても多くの気づきと学びを得ることができた。また、インドに押し寄せている経済発展の大きな波もあちらこちらで発見した。今度の津波は、より大きな被害をもたらす可能性が大きい。団結と連帯で準備していただきたい。

小頭 芳明(大阪同和・人権問題企業連絡会)

ダリットの人びとの生活は、安定からはほど遠く、子どもたちに教育を受けさせることは容易ではない。私たちが訪問した「ダリット子どもデイケアセンター」はこのようなダリットの子どものために建てられた施設である。



上)ダリット子どもデイケアセンターで遊ぶ子どもたち
下)津波被災地での調査の様子

センターでは、子どもたちが歌やお芝居を披露してくれた。そこで演じられたお芝居の内容が辛辣なのにはおどろいた。さらに、その批判精神の強いお芝居を、子どもたちがしっかりと演じているのには、さらにおどろかさされた。「女に生まれてきたから不平等なめにあう」という現実的な話、また「食料を調達するのめんどろ、息をするのめんどろだ」といっているうちに息絶えてしまう怠惰な男たちの話を、10歳前後の子どもたちがいっしょうけんめい演じている。歌や芝居は文字の読み書きができなくても理解でき、それでいて内側にうったえかける力も大きい。ここでは演劇というものが、教育上重要なものとして考えられているのだろうと思われる。

教育施設の支援は、結果が今日明日すぐに出てくるものではない。しかし、次世代を担う若い人を育てる場として考えたときに、その重要性は絶大である。「施設という『入れ物』をつくっておしまい、ではなく施設の運営まできめ細かくケアしながら、維持していくことが必要だ」というIMADRスタッフの言葉が、子どもたちにふれあうことによって重みを増して伝わってきた。

片木 真理子 (部落解放・人権研究所)

性産業の仕事をしている人たち(セックスワーカー)の解放運動についても話を聞くことができた。この仕事をしている女性は初めからこの仕事をしたいと思っていたのではなく、何かしら理由がある。「夫がいなくなり途方に暮れていると、いい家事労働があるからとブローカーに騙されてティルタニ(性産業が盛んな観光地)にきた」「再婚したが夫の暴力に遭い、家をでて、この仕事に就かざるを

得なかった」と女性たちは話す。また、一旦この仕事につくと社会的偏見からなかなか家族のもとには戻れない。セックスワーカーということで家が借りられなかったり、ばかにされて公共の水が飲めないこともあった。売春が警察に見つかり、麻薬や人身売買と同じように罰せられるのに、買ったほうは何の罪にも問われない。それどころか正当な理由なく投獄をほのめかし彼女らを脅しレイプし賃金を奪う。とても考えられない話だ。代表のファティマさんは、「セックスワーカーは社会的に市民として認められていない、彼女たちの解放なくして真の女性解放はあり得ない」とうったえ活動を強めている。成果が感じられる話も聞いた。「今では警察が脅してきたらSREDのカードを見せ、私は活動家だ、と言うと警察は何も言わず去って行きます」と誇らしげに話してくれた。また会って話しを聞き、力をともにしたい(ともにするのではなく私がパワーをもらっているのですが)。

坂東 恵子 (部落解放同盟和歌山県連合会)

初めてのインド訪問。今回参加するにあたって、視察をし、現状を知ることだけで何の意味があるのだろうかという疑問があった。しかし、ダリットの人びとの言葉から次の3つの意義を確認した。

1つは、彼らは日頃、他カーストや政府から抑圧されていて、自分たちの辛さ、苦しさを誰にもうたえることができない。へたに政府に対して苦情をうたえようものなら逆に逮捕されてしまう。そのような状況であるから、自分たちの言うことを親身になって聞いてくれ、理解してもらえる人がいるということが大いに救いになる。2つめは、ダリットの人びとにとって、理解者がいる、味方がいる、しかも海外から支援を受けているということは他カーストからのいじめや嫌がらせに対する抑止力になる。3つめは、インドにおけるダリットの存在とその現状をより多くの人に伝えてもらいたいということであった。

その願いに応えるべく、日本に帰ってきてからことある毎にインドにおける貴重な体験を皆さんに伝えていくところである。

川上 哲矢 (世界救世教いづのめ教団)

(まとめ: IMADR 事務局)

- (1) 本誌前号に関連記事掲載。
- (2) 全体の報告書は7月末頃完成予定。
- (3) TNWFはタミルナドゥ州内の市民・民衆運動の連帯を強めるため、SREDやタミルナドゥ・ダリット女性運動(TNDWM)などと連携して活動している。
- (4) 村の所有物として、男性からの性的搾取が容認されている。